

馬路村議会「村づくり推進常任委員会」は、令和8年4月22日から24日能登半島震災について、現地視察及び調査を行いました。以下視察の報告をします。

輪島市の被災状況

1. 人的・住家被害の概要

長引く避難生活や環境の変化により、直接死だけでなく、災害関連死が大幅に増加しているのが現状である。

- ・ 死者数：227名（うち126名が災害関連死として認定）

・ 住家被害：

- ・ 全壊：2,311棟
- ・ 半壊：3,971棟
- ・ 一部損壊：4,352棟

- ・ 避難状況：令和7年末までに必要とされた仮設住宅（約6,800戸）の整備は概ね完了し、避難所生活からの移行が進んでいる。現在は「災害公営住宅」への入居申し込みや建設が本格化していた。

2. インフラ・産業の復旧状況

〈ライフライン〉

- ・ 電気・水道：令和6年中に概ね復旧したが、一部の損壊が激しい集落や山間部では、個別の修繕や水道管の再敷設が続いていた。
- ・ 道路：主要幹線道路（能登里山海道など）は復旧しているが、輪島市内の生活道路や山間部では、依然として土砂崩れの影響で通行制限が残る箇所があった。

〈産業と経済〉

- ・ 輪島朝市：火災により約240棟が消失した朝市エリアでは、がれき撤去が終了し、再建計画に基づいた街並みの復旧作業が始まっていた。復旧作業が完了しても以前のような賑わいのある朝市として復興できるのか、心配や不安の声も多くある。
- ・ 漁業：地盤隆起（最大4m）により壊滅的打撃を受けた輪島港だが、令和7年から段階的に漁を再開。令和8年現在は、本格的な本復旧工事が進められている。

3. 複合災害の影響

令和6年9月に発生した「奥能登豪雨」が、復興を遅らせる大きな要因となっている。

- ・ 地震で脆弱になっていた地盤に豪雨が重なり、新たな土砂災害や仮設住宅の浸水被害が発生。これにより、二重に被災した世帯への支援と、さらなる防災対策の強化が進められている。

輪島市の復興状況

令和6年能登半島地震その後の豪雨被害を乗り越え、現在「輪島市復興まちづくり計画」に基づいた具体的な再建が進んでいる。

1. 復興の基本コンセプト

「生活の再建」「生業（なりわい）の再興」「都市の再編」を3本柱としている。単なる復旧にとどまらず、将来にわたって住み続けられる「個性豊かで魅力あるまちづくり」を目指している。

2. エリア別の重点復興内容

〈輪島朝市周辺エリア〉

最も被害の大きかった朝市通り周辺では、令和8年3月末から本格的な復興工事が開始された。

- ・ 土地区画整理：延焼被害を受けたエリアの土地を整地し、道幅の拡張や多目的広場の整備を行っていた。

- ・ にぎわい再生：令和8年夏頃から順次、店舗や住宅の再建が可能になる見込みである。観光客が「歩きたくなるまち」を目指し、電柱の地中化や伝統的な街並みの再現が検討されている。

〈輪島港・産業復興〉

- ・ 輪島塗の再興：工房の共同化や、若手職人のための「チャレンジショップ」開設、デジタル技術を活用したトレーサビリティ（生産履歴管理）の導入が進んでいた。
- ・ 港湾機能：「輪島港復旧・復興プラン」に基づき、漁業基地としての機能回復に加え、観光クルーズ船の受け入れなども視野に入れた整備が行われていた。

3. インフラと住まいの再建

- ・ 道路（国道249号）：沿岸部の地滑り崩落箇所などで現在も大規模な復旧工事が続いている。令和8年内にもさらなる通行確保が計画されている。
- ・ 災害公営住宅：仮設住宅からの移行先として、市内各所で災害公営住宅の建設・入居申し込みが、順次始まっている。



珠洲市の被災状況と課題

珠洲市は震源に近く、地震・津波・液状化に加え、その後の豪雨被害も受けるという非常に厳しい状況に置かれていた。

1. 地震による直接的な被害

地震発生直後、珠洲市では市内全域にわたる壊滅的な被害が報告された。

- ・ 住宅被害：市内約 5,800 世帯のうち、全壊が約 1,700 戸（約 3 割）、半壊以上を含めると約 3,900 戸（約 3 分の 2）に達した。
- ・ 津波と地盤変動：沿岸部では 4～5メートルの津波が押し寄せたほか、大規模な地盤の隆起と沈下が発生した。漁港が干上がっている被害や、海面上昇の被害を目のあたりにし、震災の恐ろしさを実感した。
- ・ インフラの寸断：下水道の管渠被災率は 80% を超え、約 800 基ものマンホールが浮上。断水も長期化した。

2. 地域コミュニティと避難所の課題

・ 避難所の課題

官民との連携が、しっかりとれていなかったり、避難所での役割分担や人数の確認など、なかなかスムーズに対応できないケースがあり、避難者間の対立や本来の役割を果たすのが難しいケースもあり、食事などの面でも最初はうまくいかずに苦勞をした。

・ 「遠慮」による健康悪化

周りに迷惑をかけたくないという思いから、体調不良を言い出せずに我慢してしまい、持病が悪化する高齢者が多かった。

・ コミュニティによる見守り

避難所内で孤立を防ぐために、地域のつながりをどう活かして「声かけ」や「役割分担」をしっかりと進めていくことが大切である。

現在の課題

復興は進んでいるものの、建設業界の人手不足や入札不調、また資材高騰によるスケジュールの遅れ、また人口流出をいかに食い止めるかが、令和 12 年に向けた大きな焦点となっている。

珠洲市の復興について

珠洲市の復興計画は、令和 8 年現在、震災から 2 年が経過し、応急対応から「本格復興」へと移行している。

1. 復興公営住宅の整備

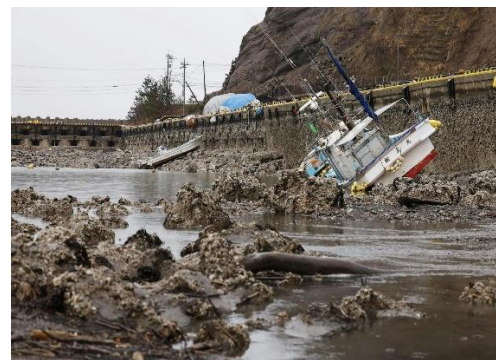
〈住まいの再建〉

- ・ 住まいの確保：応急仮設住宅の入居から、より恒久的な「復興公営住宅」の整備が始まっている。
- ・ 新たな課題：建設資材の高騰や人手不足により、個人の自宅再建が思うように進まないケースも多く、高齢化による再建断念も深刻な課題となっている。
- ・ 着工状況：馬縞町（まつなぎまち）での戸建て住宅（令和 9 年 3 月完成予定）をはじめ、市内各地で公募や建設が進んでいる。
- ・ 多様なニーズへの対応：集団移転や「買い取り型」の復興公営住宅など、住民の意向調査を繰り返しながら、希望に合わせた供給調整が行われている。

2. インフラの強靱化

〈災害に強いまち〉

- ・ 上下水道・道路：断水や道路の損壊が激しかった地域での本復旧が進んでいる。



門前町黒島地区の被災状況と課題

黒島地区は、江戸時代から明治時代にかけて北前船の船主や船員が居住していた歴史的な町並みが特徴であるが、壊滅的な被害を受けた。

1. 被害の概要と特徴

- 歴史的建造物の損壊：地区内の約200棟の伝統的建造物のうち、多くの建物が全壊または半壊となりました。特に「男波（おなみ）」と呼ばれる独特の黒い瓦屋根と下見板張りの壁を持つ建物が、震動により大きなダメージを受けた。
- 地盤の隆起：震災により、黒島海岸一帯では大規模な地盤隆起（約2メートル以上）が発生しました。これにより、かつての海岸線や漁港の機能が大きく変化し、景観にも影響を与えている。

2. 保存地区としての復興の取り組み

- 重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の維持：通常、全壊した建物は解体されることが多いが、黒島地区では「町並みの維持」を最優先とし、可能な限り元の部材を活かした再建・修復が進められている。
- 専門家による支援：文化庁や全国保存伝建地区協議会からの専門家が派遣され、個別の建物調査と、伝統技法を用いた修理計画の策定が行われている。
- 旧角海家（国指定重要文化財）：地区のシンボルである旧角海家住宅も大きな被害を受けたが、平成19年の能登半島地震後の修復経験を活かし、再び長期的な復旧プロジェクトが進められている。

門前町黒島地区の復興について

- 住民の帰還率：避難先から黒島地区へ戻ることを希望する住民は多いものの、住宅再建にかかる多額の費用（伝統建築ゆえのコスト高）が課題となっている。
- 「防災」と「景観」の両立：隆起した海岸線の活用や、将来的な津波・火災への対策を施しつつ、いかに北前船の里としての情緒を維持するかが、現在のまちづくりの議論の中心となっている。

黒島地区は、震災という逆境を「地域の歴史を見直し、次世代に継承するための機会」と捉え、全国的にも珍しい「伝統建築の被災からの再生モデル」として注目されている。



和倉温泉の現状課題と復興

〈旅館・インフラの物理的な再建〉

震災により、全 21 軒の旅館すべてが一時休業を余儀なくされた。

- ・ 建物の損傷：令和8年4月現在も、多くの大型旅館が修繕や建て替えの途中にある。一部の旅館は解体され、更地になっている場所もあった。
- ・ 護岸の復旧：海に面した和倉温泉にとって崩れた護岸の修復は急務である。国が主導して工事を進めており、令和8年度中の完成を目指しているが、これにはまだ時間が必要である。

〈観光客の減少と「復興作業員」中心の需要〉

かつては年間 100 万人以上が訪れた観光地であるが、客層が大きく変わった。

- ・ 宿泊客の変化：営業を再開している宿も、現在は観光客ではなく復興工事の関係者が主な宿泊者となっているケースが多い。
- ・ 街の活気：公衆浴場「総湯」などは再開しているが、宿泊できる部屋数が限られているため、一般の観光客がゆっくりと滞在できる環境が完全には整ってはいない。

〈人材の流出とコミュニティの維持〉

長引く休業や避難により、旅館を支えていた仲居さんや料理人などの専門スタッフが他の地域へ移ってしまう「人材流出」が深刻な問題である。

和倉温泉では単に「元に戻す」だけでなく令和 22 年を見据えた新しい街づくりを計画している。

1. 「浴衣で散策」できる街：以前よりもきやすく、回遊性の高い温泉街を目指す。
2. 関係人口の創出：観光だけでなく、ワーケーションやボランティアを通じて、継続的に関わる人を増やす。

《まとめ》

今回の視察について、当初輪島市議会また他の議会との意見交換も予定していたが、諸事情により受け入れができない旨の報告があり、キャンセルになったことは残念であった。

現地視察については、過疎、高齢化など能登半島と共通した部分も多く、情報を得る有意義な視察研修となった。

発災から2年経てもなお、復旧半ばである能登半島の状況を目のあたりにし、いかに日頃から備えておくこと【＝自助】の大切さが必要であることを痛感した。自らの命を守り協助に繋げるためにも、今後も村民の方々に対し防災意識の観点から、家屋の耐震等の備えの大切さを共に考え、減災につながるよう政策提言に努めてまいります。

また、行政の一員として「どうしたらよいのか」「何をすべきか」を考えていきたい。

